

1. はじめに

高齢社会に突入し、我々は「長い老いを生きる」ことを考えなければならなくなった。老いを意識することは、その先にある「病」や「死」を同時に浮かび上がらせることになった。永らく病院に預けてきた病や死を、すまいの中に位置付けようとする動きが、近年見られるようになってきた。緩和ケア病棟の成長はその1つのあらわれである。また、介護保険の導入は、今後在宅での看取りを後押しし、医療・福祉の対象となる人の多くが、在宅療養をするようになると予想される。

一方では、すまいが病や死を内包しなくなる流れと時を同じくして、すまいの形もnLDKを代表とする近代的な平面形に主流が移っていくこととなる。一度くり出してきた「病」や「死」を、改めて取り込んでいくとき、「すまい」はいかように変容するのであろうか。

病や死は個人におこる出来事である。その個人が、専門的技術を持つ病院という場へ移動すれば、「個人」が「医療システム」の中に位置付けられる。多くの場合、医療の範疇で病や死を受けとめてきたのが現代のあり方である。一方、家族がともに住み、地域の中で生活する拠点たる「すまい」に療養の場を求めることは、死や病を「家族」や「地域」などのコミュニティの問題として捉えていかなければならないことを指している。現在の私達の社会や地域、家族、そして「すまい」はこの転換を支えられる条件を満たしているのであろうか。

本研究では、特に「すまい」と「家族」のあり方に着目して論を進めるものである。在宅で終末期を過す家族は、現在の「すまい」の中で患者をいかに支えているのか。また、専門家による訪問介護・医療サービス等が、さらに彼らをいかに支えているのかについて分析を深める。

本研究では「看取りをめぐる家族像」と空間のあり方に着眼することにより、終の棲家としてのすまいについて論じるものである。